

夏は終わらない

「好間の町に遠くともしびが宿るころ、テニスコートのほとりから見る阿加井岳と水石山が燃えるように美しかった。」大阪の関西同窓会で淵先輩がそうおっしゃっておられた。

「奈良医大を卒業して、婦人科の医者になったが、梅毒の患者を診ることが多かった。子どもがその病気を背負って生まれてくるのを何としても阻止したかった。あるとき、ペニシリンを打つと、梅毒の子供が生まれなくなっていた。梅毒にペニシリンが効くことを発見したのは僕なんだ。」85歳にならんとするその言葉は明瞭であり、お姿も矍鑠としている。しばらくたつと、私のそばで、高校生時代のお話を何度もされる。奈良医大で相撲部に加わって大男と相撲を取り勝った話も驚いた。

アイディンティティとしての磐城高校を確かめに毎年参加されている。肩を組んで校歌を大きな声で歌い、学生時代の自分を取り戻しているようだった。高校5回卒業だから、私よりも25歳年上である。大阪の堺市北区中百舌鳥町にレディースクリニックを開業していると聞いた。

いわきの本部同窓会から始まって、関西・仙台・郡山と同窓会の旅が続く。これから、在京同窓会、名古屋同窓会、北海道同窓会、勿来同窓会、茨城同窓会、常磐興産同窓会等々度の同窓会でも磐城への愛着の嵐である。後輩たちへのエールの嵐である。

「甲子園で待っているから。」「花園でも待っているから。」淵先輩は、私にこう言って励ましてくれた。

この方たちにもう一度甲子園のプレーを見せなければならない。花園での雄姿を見せなければならない。磐城高校の魂の姿を伝えなければならない。

青春時代という夏は、いくら年をとっても、終わらないものです。特に、心の奥底から友人や恩師や数々のエピソードの満ち溢れた高校時代の思い出は、今の自分の原点として振り返る自分の核のようなものです。核力によって、様々な電子がその周りを回り始めるのが人生なら、核力そのもののほとばしる力が自分の存在そのものであるはずです。

故郷は遠きにありて思うものと書いたのは室生犀星ですが、遠き所においても決して忘れられない自分の原点を高校時代に見つけておられると考えます。

間違いなく、磐城高校は3万6千の方々の核力によって成り立っています。今は帰ってこられない人や、帰るべきではないと考えている方でも、いざ、校舎が近くなるといろいろな思い出がよみがえると思います。夏の間にも、どうぞ、機会があればいらしてください。

